常楽経師門流伝記の考察

中村孝也

常楽経師伝は既に先学によって、秀れた研究がなされているが、ささやかながら経師門流伝記に関する伝承と山根師『日経上人御消息集』に見られる二三の人物について、考察する。拙稿―常楽院日経小伝―参照

経師の師僧伝承に関係するものとして「日殷説、日戒説」があり、(1)の日殷伝承の根拠として、茂原市大塚家伝承によれば、宮谷本国寺七世、国府関如意輪寺四世日精(1)は、経師の説に同調弟子の礼を取り、自己の本尊に経師の師弟相承を付記して、相伝せしめたと云われる。その本尊付記は『慶長十七壬子南呂十五日、信心旦越、大塚外記授与之』とあり、右肩に「不惜身命日経上人」左肩に「大僧正日殷上人」と自記して居り、普通は妙満寺歴代としては、日義、日運、日泰、等の各師を連ねるのに、日精は特に日什末流代々聖人として、経師の生前中に「日殷、日経」の二師を列記せるは注目すべきある。

参考に経師門下における、師弟相承を付記した一例を挙げると、上行寺日応の本尊「日経、日秀」の二師を付記したものが、二幅所伝されている。(川崎省吾、穴倉健吉蔵)

宮谷本国寺檀林は、日精の代に始まると所伝され、経師の弟子境智日秀が、本国寺学室にて勉学の所伝があるのと参照すれば、日経の説に同調、茂原在如意輪寺に陰居、本国寺を兼帯した日精(清)の教化が、日秀の経師に投ずる遠因ではないかと思われる。

福俵本福寺の伝承として、故畑台観師説によれば、経師は師弟相承の縁故によって、本福寺住職になったとする寺伝があったと云われ、本福寺は日泰の弟子日行の開基であり、東金本漸寺過去帳によると、日行の弟子が日殷であって、日殷の弟子が日経と推定すれば、その寺伝も参考になろう。残念乍ら本福寺過去帳並に所伝文書の欠失により、今後の江戸期の時代写しの精査を期待したい。(2)の日戒伝承としては、妙泉寺先住某師の説に依れば、大網白里町北吉田妙泉寺の、経師に関係した門徒改め説、当寺三世日戒(天正五年八月七日化)と日経の関係説は、文献不詳の為確定はさけたい。妙法寺日戒説は論外。

経師の『千僧供養意趣日記（元和元年）(2)』によれば「予遵法難籠知見谷庄屋、累年月依抱、日経此夫婦之欲救護、勧千僧供養、此大善願結始、之為功徳成就」とあり、知見谷の庄屋であった、築後守常経、妙経の夫妻に序を与えている。この築後守常経について、去る昭和三十八年、南横川の某家にて「真珠院常経」宛の日経の書状を確認、無年号の三月吉日とあり、山根師『日経上人御消息集』に見られる「真珠院、常経」と同一人であろうと思われる。同書の番号の内（三、五、七、八、十、四六、五一）に「真珠院」の名が見られ、同書の内（二九、四九）に「常経より、常経坊」とあり、前例の玉泉坊日導の如く、在家の道心として坊号を許されたものか知見谷には慶長十六年に「本妙寺」が日秀を開基として建立され、大日本史料常楽編所載『族譜』に見られる「掃部」との関係は興味を起させる。

山根師『日経上人御消息集』の「鷲山坊」について（九、二二、二八、四二）の内にその名が見られ、日経記などを対照すると、入牢の法難を受けたように見られるが、更津成就寺に経師本尊を寄進せる物に「鷲山坊日延」とあり、鷲山坊の法難について、関連せるものか日秀宛の書状に「殊更一段と物入り寺一造作ノ刻、我等を可賀と小座迄結構に、畳まで念之入候事、念深志厚近比祝着申候、乃至、又鷲山坊迎と被仰候、先以御無用と見合被下云々」とあり、日秀によって京都に寺が建立された事は、日秀一返首題に「前略、為末代仏法山慶伝寺常高院相伝之、存慶境住坊日智与之」とあって、慶伝寺が法難後まもなく建立され、日経書状に「預懇札に慶伝了頑、折伏談義御持□よゝ申候由」又「折伏之立行なくハ槃昌も不入」とあり、山根師『日経上人御消息集』の正善院、境智院宛状に「又京廿一ヶ寺謀叛をはや御つけ待候、経伝事早々洛中御はらい待候」とあるは注目すべきで「経伝」とあるは「慶伝」と同一ではあるまいか、前述の茂原清宮文書にある「慶伝・了頑」を念頭に置いて、慶長十七年壬子七月三日の本尊(3)に「於京都書之、中道院日貴与之、了頑、了運坊」とあって、経師は京都に一時居住していた事が知られ、日経の建仁寺帯在所伝と共に、経師と慶伝寺の関係は一考の余地があり、慶長十七年に日経有縁の寺院（常楽寺、本興寺）が迫害を受けたが、鷲山坊の法難も、慶伝寺に関係したものと推定する。慶伝は従来僧名として解釈されていたが、日秀の本尊付記によって「寺名」として解明されなければならない。慶伝寺は現存の「妙満寺末寺帳」に無いので、慶

長十七年以後再興されなかった、ものと思われる。

〔註〕

(1) 慶長一九年寂八一才（同寺過）

(2) 写本、筆者蔵

(3) 大網白里、中古家蔵

楞伽経における訳経史上の一問題点

清水要晃

『楞伽経』は経録に見る限り、次に記す様に四回翻訳されているが、現存するものは三訳の四訳三存の経典である。

(イ)曇無讖訳・楞伽経四巻…涼訳〈欠本〉

(ロ)求那跋陀羅訳・楞伽阿跋多羅宝経四巻…宋訳

(ハ)菩提流支訳・入楞伽経十巻…魏訳

(ニ)実叉難陀訳・大乗入楞伽経七巻…唐訳

ところで、『唐訳』には女帝・則天武后の序が冠せられているが、その中に於て『唐訳』訳出について、

三陽宮内重出二斯経一　討二三本之要詮一　成二七巻之了教一（大16・587上）

と記されている。即ち、七巻の訳出に際し、三本のものを参照したと見る事ができるが、三本が何を意味するものか不明瞭である。『唐訳』翻訳の様子を記すものには、他に法蔵の『入楞伽心玄義』がある。（以下『心玄義』と略記）『唐訳』は実叉難陀一人の手によるものではなく、復礼、法蔵等の者と共に訳出されたもので、その法蔵が『心玄義』中に次の様に記している。

今則詳二五梵本一　勘二二漢文一　取二其所得一　正二其所失一（大39・430中）

この文章は、先の序に云う三本とは明らかに矛盾している。『心玄義』では五梵本二漢文によって『唐訳』をなしたと記されるものが、序では三本のものによっているとしているのである。序の三本とは何を指しているのであろうか。この疑問は既に鈴木大拙博士によって提示されているものであるが、小稿では、この点について更に若干の検討、推論を加えるものである。

先ず、序の三本であるが、これにどの様な解釈が可能であろうか。第一に漢訳三本、第二に梵本写本三本の見方が考えられる。然し、序の三本を漢訳と見ても『心玄